

フェーリクス・J・ヴァイルと その社会化論、アルゼンチン論

Felix J. Weil and His Writings on Socialization and Argentina

八 木 紀一郎

Since Martin Jay's history of the Frankfurt Institute for Social Research (1973), the name of Felix J. Weil (1898-1975) has been known as being its founder. However, his life and writings have not been of much interest to researchers. In this paper, I provide an overview of his life and writings. Growing up intellectually in the turbulent years of German revolution 1918-1923, he represented the typical radicalism of that age, and he spent his fortune supporting various cultural activities. Out of his writings the discussion on the concept of socialization and the politico-economic analysis of Argentina (his country of birth) are worth of mention.

Kiichiro Yagi

JEL : B14

キーワード : フランクフルト学派、マルクス主義、社会化、アルゼンチン、反ユダヤ主義

Keywords : Frankfurt School, Marxism, Socialization, Argentina, Anti-Semitism

1. 20 世紀思想史の波間のなかで

フェーリクス・J・ヴァイル (Felix José Weil:1898-1975) の名前が思想史研究者に広く知られるようになったのは、1973 年にマーチン・ジェイの著『弁証法的想像力』(Jay 1973) によってフランクフルト社会研究所の設立者として紹介されて以来のことであろう¹⁾。20 世紀思想史における中心的な渦の一

1) Jay (1973) に前後して公刊された Laquer (1974) では、フランクフルトの社会研究所の出資者であるとともにエルヴィン・ピスカトールの左翼演劇の講演者としてヴァイルの名前があらわれる (訳書 177 ページ)。しかしその 6 年前の Gay (1968) にはヴァイルの名前はなかった。

つと目されているこの研究所は、第一次大戦直後の政治的激動のなかで急進的マルクス主義に影響を受けた青年ヴァイルが、アルゼンチン産小麦の取引で巨万の資産を形成した父ヘルマン（Herrmann Weil: 1868-1927）を説得して研究所のための財団を創ることで生まれた。

ヴァイルは単なる資金抛出者ではなく、この研究所の政治経済学部門の研究員であり、1929 年に所員をやめてベルリンに移るまで、カール・グリュンベルク（Carl Grünberg: 1861-1940）を所長にいただきながらも、フリートリッヒ・ポロック（Friedrich Pollock: 1894-1970）とともにこの研究所の実質的な運営をつかさどっていた。両大戦間期のマルクス文献学における最大の事業であった『マルクス＝エンゲルス全集』（旧メガ）も、ヴァイルの研究所がドイツ社会民主党本部とモスクワのマルクス＝エンゲルス研究所のあいだに入って実現したものである。この出版事業の原典となったマルクスとエンゲルスの遺稿類はベルリンの社会民主党本部の書庫からフランクフルトの研究所に運び入れられ、その地下室で撮影された写真がモスクワに送られたのである。ヴァイルはベルリンの社会民主党本部との交渉にあたりとともに、『全集』をドイツ語のオリジナル・テキストとして出版するために、モスクワの研究所と共同してマルクス＝エンゲルス・アルヒーフ出版社を設立した²⁾。しかし、このモスクワとの共同事業は大学保守派や州警察の研究所に対する攻撃を強める材料となり、ヴァイルを研究所から去らせる原因となった。

ヴァイルは研究所の所員をやめたあとも、研究所を支える財団（社会研究協会）を維持し、研究所が重要な決定をする際の中心集団に留まった。ヴァイルは、グリュンベルクが 1928 年に心臓発作に倒れたあと、研究所の新しい所長として古くからの友人であった哲学者マックス・ホルクハイマー（Max Horkheimer: 1895-1973）を呼び、それまで経済・社会学部にあった研究所所長の教授講座を哲学部に移して、ホルクハイマーのために社会哲学の講座を新設した。またナチスの政権獲得をいち早く予想して、財団（社会研究協会）の資金を国外に移して研究所の亡命にそなえた。ホルクハイマー所長に率い

2) Hecker (2000) を参照。

られ、スイス、フランス、米国と転々しながら研究活動が続けた 1930 年代、1940 年代の研究所の出発点を整えたのもヴァイルであった。ヴァイル自身は 1931 年末にヴァイル家の事業の本拠地ブエノス・アイレスに向かい、同地で数年過ごしたのちニューヨークに移っている。1930 年代にも研究所の雑誌にレビューを寄稿し、1944 年にはニューヨークに移って来た研究所に合流して再度研究所の所員になったが、その際にも研究所に巨額の資金を提供した。

このようにヴァイルは創設以来 30 年間にわたって研究所を支え続けた功勞者であるが、ヴァイル自身の学術活動について掘り下げた研究は存在しない。³⁾ 研究所のパトロンであったが、この研究所を中心にした学派の綺羅星のなかに入らない素人研究者とみなされているからであろう。しかしヴァイルにもいくつかの公刊著作があり、それらを見捨てることはこの人物に対する評価として失当であろう。ヴァイルの著作のうちのあるもの——社会化論にはじまる社会主義論——は研究所が有していた本来の志向の一つを示すものであった。また他のもの——アルゼンチン論——は研究所の枠を離れてはいるが、研究所の社会科学的研究の一つの発展可能性を示すものであった。本稿は、ヴァイルの経歴を紹介するとともに、上記 2 領域での彼の著作について考察することで、この人物に対する認識を深めたい。はじめに（第 2 節）彼がどのようにして思想を形成して研究所とかかわり、またアルゼンチンとどのような関連をもったのかについて説明する。そのあと、ヴァイルの社会化論について（第 3 節）、次にアルゼンチン論（第 4 節）を紹介し、最後に彼の後半生について略述（第 5 節）して本稿を閉じる。

3) 私の知る限りヴァイルを単独でとりあげた研究文献は Eisenbach (1987) だけである。これは表題からは、ヴァイルがチュービンゲン大学と関係をもった 1919 年だけを対象にしているようであるが、ヴァイルの自伝草稿 (Weil 1975) と存命の親戚や知人からの聞き取りをもとにして 1919 年の以前と以後についても包括的な情報を提供している。本稿でもヴァイルの経歴についての情報は Eisenbach (1987) および自伝草稿 (Weil 1975) に基づいている。私は 1973 年 5 月 14 日に、この自伝草稿に基づいたヴァイルの講演をフランクフルトで直接聴いた。(八木 1976) その後、ヴァイルおよびその相続者 (Frank E. G. Weil) との交信によって、この自伝草稿の存在を知り、1979 年 2 月に後者からこの草稿に書かれている内容を伝えてもらう約束を得ていた。しかし、このテーマにかかわる探求を永らく中断したこともあって、この自伝草稿が読めるようになったのはその 30 年後であった。

2. 「サロン・ポリシェビキ」⁴⁾の誕生

フェーリクス・J・ヴァイルは 1898 年 2 月 8 日にブエノス・アイレスで、父ヘルマンと母ローザ (Rosa geb. Weismann: ?-1912) のあいだに生れた。⁵⁾ 3 年遅れてやはりブエノス・アイレス生まれの妹アニータ (Anita Alicia: 1901-1951) がいる。兄妹二人とも出生によってアルゼンチン国籍である。

ヘルマンはバーデンのシュタインスフルト村 (Steinsfurt bei Binsheim) 出身のユダヤ系穀物商人⁶⁾ で、妻ローザはヘルマンがマンハイムで商業徒弟をしていたときの主人の娘であった。ヘルマンは弱冠 18 才で業務代理人として認められるほどの商才があり、親方から娘との結婚を許されたのであった。ヘルマンはマンハイムからさらに当時の国際交易の中心であったアントワープに移り、そこに本拠を置く Mosco Z. Danon 商会に見込まれて新興の穀倉国アルゼンチンと取引する支店の開設のため 1888 年にブエノス・アイレスに派遣されていた。ヘルマンは同地で自らも穀物取引の商会 Weil Hermanos & Cia. を起こし、Danon 商会が投機取引に手を出して破産したあとも順調に事業を発展させた。1900 年には、ヘルマンの事業は傘下の他 2 社と併せてアルゼンチンの穀物取引の 90 パーセントを取り扱い、世界の各地に支店を置き、独自の商船隊を組織できる大商会にまで成長していた。

しかし事業の成功にもかかわらず、ヘルマンは自分が学校教育を十分に受けられなかったことを残念に思っていた。ヘルマンは、一人息子のフェーリクスに自分に欠けていた人文的教養をもたせたいと考え、1907 年にフェーリクスをフランクフルトに送り、同地のゲーテ・ギムナジウムで学ばせた。しかしフェーリクス自身は死語であるラテン語を学習させられることに不満であったようである。なお、フェーリクスはこのギムナジウムで後に彼が創設した研究

4) 前注で言及した講演でヴァイルが当時の自分を特徴づけた表現である。(Wiggershaus (1988) S.23, (1995) p.13)

5) アルゼンチンで出生登録をしたため、フェーリクスの名前にはさらに Lucio というスペイン語名まで付け加えられた。

6) ヘルマンはシュタインスフルトで穀物商を営んでいたヨゼフ (Josef Weil: 1823-1887) が妻ファニー (Fanny geb. Götter: 1824-1914) とのあいだにもうけた 13 人の子供のうちの 10 番目であった。兄のなかには米国にわたって成功したサミュエル (Samuel Weil: 1867-1922) がいて、ヘルマンがブエノス・アイレスで起こした会社の共同出資者になっている。

所の研究員になるレオ・レーベントール (Leo Löwenthal: 1900-1993) と識り合っている。

フェーリクスに遅れてヘルマン自身も妻と娘とともにフランクフルトにやってきたが、ツェッペリン・アレーに豪華な邸宅を構えるまでの間は、市内のホテル・インペリアル・スイートを借り切って住んでいた。ヘルマンがドイツに帰国したのは、彼と妻の二人とも重い病にかかっている祖国ドイツの高度な医療を必要としたためであった。落ち着き先としてフランクフルトを選んだのは、ユダヤ人に偏見の少ない商都であったためであろう。妻ローザは第一次大戦開戦前に亡くなったが、戦争が始まるとヘルマンは国際通商の専門家として国内の研究機関や参謀本部の助言者となって愛国者ぶりを発揮し、1917年の8月には、バード・クロイツィンゲンで一人息子フェーリクスを引き連れ皇帝謁見の荣誉にあずかっている。しかし、他方でアルゼンチンが中立国であることの利点を活かして大戦中も事業を拡大し、穀物取引だけでなく食肉輸出や土地投機にも乗り出していた。

ヘルマン自身はドイツの戦勝による講和を望んでいたが、その望みが消えるとその収益を慈善活動やユダヤ人同胞の援助に投じるようになった。大戦後に、彼がおこなった慈善活動は孤児院、復員兵、ユダヤ人組織への援助から、貧しい芸術家、大学生への援助、さらにフランクフルト大学の学部や研究所への拠金に及んでいる。学術への援助の最たるものが、息子フェーリクスの希望にしたがった研究所の設立であった。⁷⁾

ギムナジウムを終えたフェーリクスは1916年にフランクフルト大学の社会・経済学部に登録した。学生クラブには所属したがその風にはなじまず、当時珍しかった自動車を持ち回り金持ちの御曹司としてとおっていたようである。彼は、他の学生の多くが兵士として前線に向かうなか国籍が違いため志願兵にもなれなかったため、1917年から終戦まで自ら希望して陸軍事務所で資材管理勤務に従事している。病身の父ヘルマンの助手としても働かなければならなかったもので、勉学のために残された時間は多くなかった。

7) ヘルマンは大学に対する貢献によってフランクフルト大学から名誉博士号を贈られている。

1918 年 11 月 4 日軍港キールに端を発した革命は、直ぐにフランクフルトに波及し、青年ヴァイルを巻き込んだ。フランクフルトに成立した労兵協議会が社会民主党 (SPD) 支持の法学者フーゴー・ジンツハイマー (Hugo Sinzheimer:1875-1945) を警察長官に任命すると、彼は学生自治会を通じて面識のあったフェーリクスに市内警備への協力を依頼した。パトロール隊の指揮者となったフェーリクスは、11 月 11 日から 12 日にかけての夜を私設の警備本部でまんじりともせず過ごすなかで、パトロール隊の労働者が持ち合わせていた社会民主党の『エルフルト綱領』を読んだ。彼はそれにより生産手段の私的所有が資本主義の基礎であることを知って、一夜にして社会主義者になった。彼は、社会主義・マルクス主義の文献を読みあさり、友人レーベントールとともに社会主義の学生グループを組織し、また当時最大のトピックであった社会化を自分の研究テーマに定めた。戦争中に軍需物資の資材管理を担当した彼自身の経験から言っても、社会主義が実現可能であると思われたからであろう。

しかしフランクフルトの社会・経済学部には彼の社会化研究を指導してくれる教授はいなかった。そのためフェーリクスは翌年の夏学期からチュービンゲン大学に転学した。1918 年冬から翌年にかけてベルリンに短期間設けられた社会化委員会の委員であったロベルト・ヴィルブラント (Robert Wilbrandt: 1875-1954) が同大学の経済学教授であったからである。ヴィルブラントは講壇社会主義者ではあってもマルクス主義者ではなかったが、フェーリクスの研究を励ましてくれた。

フェーリクスはチュービンゲンですぐに学生社会主義者グループの結成に加わり、1919 年 4 月にイエナで開催されたドイツ社会主義学生連盟の大会にチュービンゲン・グループの代表として参加した。彼はそこで、イエナ大学で私講師になっていたカール・コルシュ (Karl Korsch:1886-1961) と知り合い、彼に強く引き付けられた。コルシュはベルリンの社会化委員会でヴィルブラントの助手をつとめた社会化問題の専門家であり、ベルリンの労働者評議会運動にも大きな影響力をもっていた。⁸⁾

8) コルシュの関連論文は Korsch (1971) (同訳書 1979) にまとめられている。

チュービンゲンでフェーリクスたちが結成した社会主義の学生グループは急進化し、その半分は結成されたばかりのスパルタクス団に急接近した。イエナでの学生連盟の大会ではフェーリクスはまだ SPD 系の提案に票を投じていたが、彼も急進化した。彼は当時シュツットガルト郊外に住んでいたクララ・ツェトキン (Clara Zetkin: 1859-1933) と知り合い、右翼によるクララ襲撃の計画を察知して彼女を自分の下宿にかくまったこともある。クララの末の息子のコンスタンティン (Konstantin Zetkin: 1885-1980) とも親しくなり、フェーリクスの最初の妻ケーテ (Katharina geb. Bachert: 1902-?) とはクララとその息子を介して知り合ったシュツットガルト出身の女性である。

フェーリクスのチュービンゲンでの修学は長く続かなかった。というのはスパルタクス団の動きに警戒の目を向けたヴュルテンベルク州警察がその活動家 13 名を一斉検挙し、外国籍であったフェーリクスともう一人の学生指導者 (Heinrich Süßkind) を州外に追放処分にしたからである。ヴィルブラントはフェーリクスに対して最後まで好意的であったが、その同僚にフェーリクスの学位取得を執拗に妨げる教授がいた。そのためフェーリクスはチュービンゲンでの学位取得をあきらめ、最後にハイデルベルク大学のアルフレート・ヴェーバー (Alfred Weber: 1868-1958) のもとで 1920 年の 5 月に学位を取得した。この論文はカール・コルシュが刊行責任者となっていた『実践的社会主義』叢書の 1 冊として翌年に出版された (Weil 1921)。

学位取得を果たしたフェーリクスは父との約束によって、新妻とともにアルゼンチンに赴いたが、事業家には向いていないことを確信して 1 年でドイツに戻っている。フェーリクスにとっての成果は、アルゼンチンで生まれつつある労働運動の歴史と現状についての論文 (Weil 1923) だけであった。

フランクフルトに帰還したフェーリクスは、もはや親がかえの学生ではなかった。彼には母から相続した遺産があったので、父からも独立して左翼の学術・文化活動を支援することができた。フェーリクスの周囲には多くの左翼の友人・知人が集まった。ルカーチ、コルシュが参加し、後のフランクフルト社会研究所の母体になったとされるサークルが集まった「マルクス主義研究週間」

は彼が金銭的な負担をして催した企画の一つである。⁹⁾他にも、ワイマール期の左翼文化出版の一翼を担ったマリク社に対する援助¹⁰⁾もこの時期に始まっている。マルクス主義を研究するためのアカデミックな研究所を創設しようというアイデアもそのなかで生まれた。それは大学に付置されるが、その運営・財政について独立性が保証される社会科学の研究所という構想に発展した。

これは父ヘルマンを動かさずには実現できない構想であった。どう考えても左翼とは言えない父ヘルマンがなぜフェーリクスの計画に賛同したのかについてはいくつかの推測がなされている。ヘルマンの動機としては、一人息子にアカデミズムへの道を開いてやろうという親としての温情、あるいは大学から名誉学位を得たことへの代償が思いつくが、息子の企画した左翼研究所を通じて革命ロシアとの商機が開かれる可能性も彼の計算に入っていたかもしれない。

しかしフェーリクス自身が父ヘルマンを説得する手段としたのは、ヘルマンが生涯気にかけていたドイツにおける反ユダヤ主義について研究する独立した研究所が必要だということであった。事実、後のホルクハイマー所長時代も含めてフランクフルト社会研究所におけるユダヤ人学者の比率は高く、ナチズムにおいて頂点に達する反ユダヤ主義の研究は、この研究所の主要トピックであり続けた。¹¹⁾

フランクフルト大学との詳細にわたる折衝を経て、1922 年 11 月に研究所の財政を支える「社会研究協会」(Gesellschaft für Sozialforschung e. V.) がヘルマンを代表、フェーリクスをその総代理として成立し、その資金によって

9) Jay (1973) はこの会合は 1922 年年初にイルメナウで開催されたとしていたが、Buckmiller (1988) は参加者の証言やいくつかの資料にもとづいて 1923 年聖霊降臨節にゲラベルク (Geraberg in Thüringen) で開催された会合がそれであると考証し、Jay (1996) も Wiggershaus (1995) もそれに従って記述を変更している。しかし、Jay (1973) の記述はヴァイルからの私信による説明にもとづくもので、自伝草稿 (Weil 1975) でも同様の日程になっているので、なぜヴァイルが 1923 年の会合を無視して 1922 年初と回想したかについては謎が残る。この会合については、Yagi (2011) も参照されたい。

10) Malik 社は出版業者 Wieland Herzfeld の下にあったが、ヴァイルはルカーチ、ヴィットフォージェルらのマルクス主義研究週間の成果を出版するためにこの出版社に出資をおこない、その実質的なオーナーになった。

11) 古松 (2014)、徳永 (2002) 参照。

所長（フランクフルト大学の教授を兼務する）招聘と所員の任命、研究所の敷地取得と建築がおこなわれた。社会研究所（Institut für Sozialforschung）は1923年2月の創設時点ではまだゼンケンベルク自然博物館の展示場に間借りしていたが、1924年6月には竣工したばかりの建物で活動を開始した。

フェーリクスがはじめその構想する研究所の所長¹²⁾として考えていたのはアーヘン工科大学の講師であった友人クルト・A・ゲルラッハ（Kurt Albert Gerlach: 1886-1922）であった。彼はコルシュと同じく、イギリスのフェビアン協会の社会主義的改造論から出発してドイツ革命の最中で急進化した社会化問題の専門家であった。フェーリクスはゲルラッハとともに研究所の設立趣意書を書いたが、ゲルラッハが1922年10月に糖尿病の発作で急死したため他の教授適任者を探さなければならなくなった。フェーリクスはベルリン大学の歴史家でエンゲルスを研究していたグスタフ・マイヤー（Gustav Mayer: 1871-1948）と交渉したが、不調に終わった。次にウィーン大学の経済史家カール・グリュンベルクに白羽の矢を立て、彼にゲルラッハとともに「イソップの言葉」で書いた研究所の企画書を見せた。グリュンベルクはフェーリクスの意図を察して、はるかに年下のフェーリクスに「同志ヴァイル」とよびかけ、マルクス主義を学術界に参入させればいいのだね、と答えた。¹³⁾

研究所の実質的な運営は、フェーリクスとポロックにまかされた。それでも、グリュンベルクが編集していた雑誌『労働運動・社会主義史アルヒーフ』*Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung*が研究所の実質的な機関誌になり、歴史家であったグリュンベルクの実証的・歴史的な研究方針が研究所に浸透した。グリュンベルクがウィーン時代に身につけてきた人脈の中からヘンリーク・グロスマン（Henryk Grossman: 1881-1950）のようなマルクス経済学者が研究所の所員になったが、彼の国外の知人たちもフランクフルトを訪れるようになった。

研究所が開設された年の8月に早くも訪れたのは、ウィーン亡命時代グリュ

12) 大学附置の研究所とするためには、研究所長はフランクフルト大学のいずれかの学部に講座をもつ教授として認定されることが必要であった。

13) なお、大学文書館に残っている資料については、Migdal（1980）を参照。

ンベルクに助けられて社会主義文献の研究者として名をあげ、革命ロシアでレーニンの信認を受けてマルクス＝エンゲルス研究所の所長になったダビッド・リャザノフ (David Ryazanov: 1870-1938) であった。リャザノフはグリュンベルクがフランクフルトに新設される研究所の所長に就任することを知って、二つの研究所の協力によって自分の年来の夢であったマルクス・エンゲルスの全集 (MEGA) を実現するという構想を抱いていた。フランクフルトの研究所のパトロンであったフェーリクスにも異議があるはずはなかった。彼はロシアの共産党員 (ボリシェビキ) との直接の接触を忌避する社会民主党の本部と交渉し、その文書倉庫に保管されていたマルクスとエンゲルスの遺稿類をフランクフルトの研究所が借り出し、リャザノフの研究所のためにフランクフルトで写真撮影をすることを許すという契約を成立させた。¹⁴⁾ リャザノフは元メンシェビキのボリス・ニコラエフスキー (Boris Nikolaevsky: 1887-1966) をこの作業の責任者にして、撮影とフィルムのモスクワへの移送を担当させた。社会研究所の地下に写真撮影の設備が据え付けられ、この作業は 2 シフト計 6 人の助手を使って 1924 年から 1928 年まで継続された。

フェーリクスはさらに、マルクス＝エンゲルス全集のドイツ語での出版のために、リャザノフの研究所と共同で「マルクス＝エンゲルス・アルヒーフ・フェアラク」という名称の出版社を設立した。この出版社は、1924 年にアルヒーフの第 1 巻を出版したが、肝心の MEGA の第 1 巻は 1927 年まで出版されなかった。ヴァイルはモスクワにリャザノフを訪ねて MEGA の刊行をせきたてたこともある。しかし、既に、その頃、ソ連共産党内での勢力を固めつつあったスターリンはリャザノフの研究所が西欧の社会民主党や共産党内外の異端派と関係があるとみて警戒を強めていたのである。

フランクフルトの側でも、この共同出版事業は保守的な大学中央に研究所攻撃の理由を与えるものでもあった。マルクスとエンゲルスの名前を冠し、両者の全集を刊行すること自体が、彼らにとっては共産主義者の政治宣伝に他ならなかった。この攻撃が執拗になったため、最後には研究所の存続を守るために

14) Hecker (2000) を参照。

この共同出版事業を解消しなければならなくなった。

フェーリクスと彼の研究所は、専門編集者の人材供給の面でも MEGA の事業に貢献した。MEGA の編集のために多くのドイツ人専門家を必要としたリャザノフは、グリュンベルクとともにフェーリクスに専門家の推薦・派遣を要請した。多くのドイツ人が二つの研究所の連携を通じてモスクワに向かった。その中には、フェーリクスのチュービンゲン時代の友人であったカール・シュミュクレ (Karl Schmückle: 1898-1938) もいた。彼はマルクス主義研究週間への参加者でもあったが、リャザノフの研究所で部門長として MEGA 編集のためにはたらき、1930 年代にスターリンの粛清によって殺された。

1928 年の暮れ、グリュンベルクが心臓発作を起こして所長の任に耐えられなくなった。モスクワとの提携の責任者であったフェーリクスも研究所を救うためにフランクフルトを去ったので、後任所長が決まるまではポロックが暫定的にその任にあたっていた。フェーリクスは反動化した社会・経済学部から掣肘を受けるよりも、マルクス主義的な視点を有した社会哲学の講座を新設する方が適切であると考えて、その教授として社会研究協会の設立以来のメンバーであったマックス・ホルクハイマーを選び新所長にすえた。後の事をホルクハイマーとポロックにまかせて、フェーリクスは文化と政治の中心地首都ベルリンに向かった。ホルクハイマーは 1931 年「社会哲学の現況と社会研究所の課題」¹⁵⁾ と題した就任講演で、研究所の新しい方針を明らかにした。グリュンベルクの雑誌は終刊し、研究所は新しく『社会研究雑誌』*Zeitschrift für Sozialforschung* を創刊した。グリュンベルクとヴァイルが組んだ研究所の第 1 期が終わったのである。しかし、ヴァイルはなおも財団（社会研究協会）を維持し財政面で社会研究所を支え続けた。¹⁶⁾

3. 社会化論から社会主義経済計算論へ

社会研究所でヴァイルが最初に開いたセミナーは帝国主義をテーマにしたも

15) Horkheimer (1931).

16) 父ヘルマンは 1927 年になくなっていた。ヘルマンのために故郷のシュタインフルト村に建てられた廟は 1938 年のユダヤ人迫害の際に蛮行と破壊の対象になった。

のであったが、それについてヴァイルが執筆した論文は存在しない。したがって、彼の研究者としての業績を評価するにあたっては学位論文以来の社会化論とそれに結びついた社会主義論が第一の対象になるであろう。

すでに説明したようにヴァイルの社会化論はドイツ革命の最中での彼の思想的急進化の産物である。ドイツ 11 月革命によって成立した人民委員会政府は、カウツキー、ヒルファーディンクらの社会主義者だけでなく、ヴィルブラントやヨーゼフ・シュンペーターらの経済学者、さらに実業家ヴァルター・ラーテナウやテオドル・フォーゲルシュタインらの経済界代表を含む社会化委員会を設置した。しかし、この委員会は統一的な結論に達することができず、翌年 2 月に全面社会化を推奨する多数派報告と社会化を部分領域に限定する少数派報告の二つを残して解散した。全国労兵協議会の「社会化即時実行」の決議にもかかわらず、革命情勢が流動的ななかで多数派社会民主党を中心とした政府は、社会化の実施に取り組む意思も能力ももたなかった。しかし、急進化した労働者の側にはなお工場評議会を基礎にした社会化への意欲が存在していた。

ヴァイルのチュービンゲンでの公式の指導教授はヴィルブラントであったが、実際上はベルリンの社会化委員会でヴィルブラントの助手をつとめ、首都地域の労働者評議会の指導者たちと連繋を保っていたコルシュに彼は影響されていた。そのような立場からすれば、工場評議会と生産手段の社会化を結びつけて社会主義を実現するという社会主義革命論になる。しかし、学位論文では、そのような実践行動を論じるわけにはいかなかったのであろう。ヴァイルの学位論文はもっぱら「社会化」の概念の闡明に充てられ、多義的な概念のなかから社会主義的な概念を選りだし、その観点から既存の「社会化プラン」を論評したものであった。それがもつ実践的意味は、ヴァイルがその読者を労働者評議会運動の労働者に求めようとしていたことから明らかであろう。

この学位論文は「社会化」への賛成反対を論じる前にその概念を明らかにする必要があるとして、ドイツ革命前およびその直後に現れた多くの社会化論を検討し、「社会化」という語が「社会化をおこなう」という「活動 Tätigkeit」の意味で用いられる場合と、この「活動の目標」である特殊な社会状態である「社会主義」の意味で用いられる場合を区別しなければならないとする。その

うえで「社会化」は以下の5点を意味するという。

1. ニーズ経済 (Bedarfwirtschaft)、即ち経済過程の基礎として社会的なニーズを統一的にまとめて確定することの実現
2. 共同経済 (Gemeinwirtschaft) としての経済過程の組織化、即ち、社会のそれぞれの成員がその能力に応じて経済過程に参加する義務と権利、「不適当な」社会的優遇や差別を排除すること、自ら選んだ責任ある指導者に自発的に従うこと (経済民主主義)
3. (私的所有であれ集団的所有であれ) 社会的な経済過程の領域にある物財に対するすべての個人的な処分権の社会による掌握：共同所有 (Gemeineigentum)
4. 上記の施策を社会の経済生活の全体に拡大すること：全体性 (Totalität)：部分的な社会化は概念的に不条理
5. 個人主義的な経済生活に意識的に働きかけて社会主義的な経済秩序をもたらすこと：積極的活動 (Aktivität)：経済的な利点を求めるための闘争 (競争、万人に対する万人の闘争) を必要な場合には強制的に「相互的助力」によってとりかえること

(Weil 1921, S. 84)

ヴァイルによる「社会化」概念のこうした純化のなかで、経済発展にともなう無意識的な「社会化」や部分的な「社会化」が排除されていることに注意すべきだろう。彼はそのうえで既存の社会化プランを検討し、移行の手段・条件と目標の混乱があることを指摘する。その欠陥の克服は、経済の社会主義的組織化の構成原理の探求と結びついているが、それは「社会化」の既存の概念から引き出されるものではないとされる。言外の結論を読みとることを試みるならば、政治行動を含む意識的で創造的な実践なくして「社会化」を社会主義の実現と結びつけることはできないというコルシュ的な「実践的社会主義」が結論になっていると考えることができるであろう。自伝草稿のなかでヴァイルは「マルクス主義研究週間」で社会化論について報告をおこない、官僚主義や人

間性無視に陥らない社会主義のあり方について論じて活発な議論を巻き起こしたと回想している。(Weil 1975, S. 278ff.) ヴァイルはそれを 1922 年と回想しているので、これは翌年のゲラベルクの会合とは別の先立って行われた会合での報告であったかもしれない。

ヴァイルの学位論文で主要な批判対象になっているのは、資本主義の発展は自動的に生産の「社会化」をうみだすという漸進・進化的な考えや、社会化に適するほど高度に発展した産業だけを「社会化」すればいいという部分的社会化論であった。それに対してヴァイルが目指したのは、意識的・創造的な全面的社会化＝社会主義的社会化論であったであろう。

全面的な社会化論に対しては、それに真っ向から反対する自由主義者の市場経済への復帰論が対抗していた。オーストリアの革命直後のレンナー政権で社会化委員会の委員長になったのはオットー・バウアーであったが、バウアーとヴィーン大学のオイゲン・フォン・ベーム＝バヴェルクのゼミナールで席をとともにしたルートヴィヒ・ミーゼス (Ludwig Mises: 1881-1973) は社会化に反対して私的企業と市場経済を擁護する論陣を張っていた。1920 年代半ばにミーゼスに合流したのがフリードリッヒ・ハイエクである。そこに生じたのが、いわゆる「社会主義経済計算論争」である。しかし、全面的な社会化論と市場経済擁護論の間に「機能的社会主義」を名乗る第三の立場が生まれていた。カール・ポランニー (Karl Polanyi: 1886-1964) の立場がそれであるが、資本主義企業に替えて労働者の生産組合を置いた英国の G・D・H・コールのギルド社会主義もそれに属するであろう。

1924 年の「ギルド社会主義的経済計算法」と題したヴァイルの第二論文は、この立場にたつポランニーの経済計算論を批判したものであった。生産者集団が経済単位になるギルド社会主義では、生産単位間および生産単位と個人あるいは社会全体の消費者集団のあいだで取引が存在し、その取引を処理するために計算価格が必要になる。ポランニーはこの計算価格の基礎として、生産における効率性を実現するための「生産性」という基準と分配にあたっての公正性を実現するための「社会的権利」という基準をあげる。前者は「自然的コスト」、後者は「社会的コスト」に対応する。生産性基準によって社会には配分

可能な剰余が生まれるので、「自然的コスト」に「社会的コスト」が加わり、分配にかかわる基準である「社会的権利」が「生産性」規準を修正する「経済計算法」が取られるというのである。取引の際の計算は、社会全体で「固定された価格」と生産集団相互で定める「協定価格」からなるが、それらは二つの費用を基礎にして決定される。

このポランニーの構想に対してヴァイルは、「社会的費用」は確定できないこと、統制されない取引があるかぎり「価格」は変動するので固定できないと批判した。取引があり「価格」があるギルド社会主義的な経済では、価格の変動を免れることができないので、交換および決済の手段である貨幣をなくすことはできず、計画経済は不可能であるというミーゼスの批判が成り立つというのである。

ポランニーはミーゼスとヴァイルに回答した反論で、ヴァイルは生産が集団単位で行われるという「ギルド社会主義」的な特徴だけに注目して、消費者を含む経済社会の全体を機能的な組織から成り立ち、相互に調整されるという「機能主義」の構想を見失っていると苦情を述べている。それぞれの機能組織は機能的な均衡を追求し、その産物である「協定価格」は固定価格である必要はないのである。ポランニーの機能的社会主義は立場としては、オスカー・ランゲなどの1930年代の分権的社会主義論、あるいは市場社会主義論、さらには1950-60年代のユーゴスラヴィアの自主管理社会主義論に近い。自伝執筆時のヴァイルはそれを意識して、この論文は現代の状況でも重要な問題を取りあつかっているが残念なことに社会主義を批判するミーゼスが正しいという結論に達したと回想している。¹⁷⁾

当時のヴァイルは全体的な社会主義経済論の立場に立っていたので、社会主義の経済計算が不可能であるというミーゼスの主張に同調したわけではない。当時のヴァイルはむしろオットー・ノイラート (Otto Neurath:1882-1945) の実物計算論 (Neurath 1922) の線に沿って、生産過程内部で技術的な数量を客観的に確定し、経済的・文化的な充用分も含めて計算することが可能である

17) Weil (1975) S.87. しかし、ヴァイルの1924年論文自体は実物的経済計算に希望をつなぐものであったので、回想録のニュアンスとは齟齬がある。

と考えていた。

「社会主義経済にとっての現実的な核心問題は次のようなものである。経済をどのように意識的に導き、ニーズをどのように確定し、配分をどのように組織するか。要するに、われわれの有する最大のトラストよりも空間的に拡がっている経済についての概観がどのようにすれば得られるかということだけではない。むしろ、貨幣、価格、費用、生産性、収益性など現在の経済学の概念のほとんど全てがその意味を変えるか、あるいはその意味が全く失われるほどの根本的な変化をこうむった経済についての概観をどのようにして得るか、ということである。」(Weil 1924, S.216)

ヴァイルの念頭にあったのは、計画経済の実施のためにゴスプランを設け、各種資材の需給バランス表などを作成にとりかかったソビエト・ロシアの試みであったであろう。ソ連の計画経済の研究者であった同僚のポロックやグロスマンからヴァイルは多くの情報を得ていたことであろう。しかし、この 1924 年論文は計画経済のための経済計算の方向を示唆するにとどまっていて、積極的な記述はない。

この 1924 年論文を一読して私に生じる疑問を二点記しておこう。その第一は、ヴァイルが構想している全体的な社会主義経済、あるいはロシアの計画経済の中で、ドイツ革命時のヴァイルがともに進もうと考えていた評議会運動の労働者たちはどこに位置づけられていたのか、ということである。1921 年の「社会化」論文のなかでも「全体性」が「社会化」の基準の一つとされていたが、同時に労働者が自ら選んだ経営責任者に自発的に従うという「経済民主主義」がそれと並んで存在していた。しかし、この 1924 年論文では全体的な計画経済が示唆されるにとどまる。全体的な計画経済は果たして経済民主主義と両立可能なのだろうか。

第一の疑問は全体的な計画経済の政治的側面にかかわる問題であるが、第二の疑問はその経済的側面にかかわっている。ヴァイルは後の自伝草稿で、先述

のように残念ながらミーゼスの主張を認めた結論になったと回想している。しかし、実際には 1924 年の論文がミーゼスの主張に同調しているのは、生産単位相互間に不確定な取引が残るギルド社会主義に関してだけであって、全体的な計画経済に対してではない。ミーゼスの批判は本来、全体的な社会主義経済（共同経済）に向けられノイラートの実物計算論をくつがえすものであったはずである。後年のヴァイルはポランニーの機能的社会主義に対するミーゼスの批判を認めることで、全体的な社会主義経済に対する批判も認めてしまったのではないだろうか。少なくとも全面的計画経済というテクノクラートのユートピアの幻想が醒めたならば、ミーゼス＝ハイエク的な自由主義的資本主義の道しか残らないような袋小路の選択をしてしまっていたように私には思える。

ヴァイルはポロックとともにモスクワに行き計画経済の実態に触れた。ヴァイルの自伝草稿にはソ連経済の見聞についての記述はないが、ポロックは 1929 年にソビエト・ロシアの計画経済についての研究書（Pollock 1929）を出版した。ポロックは共産党内外の政治対立に踏み込むことを慎重に避け、ソ連に対する批判的な言辞は控えている。それはソ連における計画経済の困難な構築過程を好意的かつ慎重に記述したものであるが、根本的には「傍観者の好奇心」（Wainstein 1931）の産物と評される書であった。しかし、その後の彼のソ連計画経済に対する見方は、社会主義というよりも国家主義的な全体主義（「国家資本主義」Staatskapitalismus、あるいは「統合された国家主義」integraler Etatismus）としての見方に近づいて行った。¹⁸⁾

1929 年以降、モスクワに遠慮をする必要のなくなったヴァイルがソビエト・ロシアを見限るのは時間の問題であった。1930 年代ヴァイルは、チュービンゲン時代の学友シュミュクレも、一緒に逮捕された同志ジュースキントもスターリンのテロルに倒れたことを知る。ヴァイルを共産主義に導いた老クララ・ツェトキンも 1933 年にモスクワで客死していた。¹⁹⁾

18) Dubiel u. Söllner (1981) S. 14f.

19) クララ・ツェトキンやカール・コルシュの影響で共産主義のシンパになったヴァイルは「ポリシェビキ化」（ロシア化）する共産党には距離を置いていた。その点では、ローザ・ルクセンブルクの影響が強かったドイツ共産党成立期の思想傾向を残していたのではないかとと思われる。彼は

4. アルゼンチン論

フランクフルトを去ったヴァイルは、すぐに彼にとってのマンチェスターであるアルゼンチンに向かったわけではない。彼はベルリンで左翼アヴァンギャルドの世界に浸った。彼はすでにマリク社の実質的なオーナーになっていたが、さらに社会学出版社を創設して出版活動を拡大した。また、エイゼンシュタイン監督の革命映画『戦艦ポチョムキン』の上映を支えたり、エルヴィン・ピスカトールのプロレタリア演劇を後援したりした。彼の出版活動は、政治上の正統派に従うものではなかった。マリク社がモスクワ系の正統共産主義から異端とみなされる出版をしていることに対して、古くからの知り合いである共産党の幹部から脅しを受けたりもしている。

1931 年の国会議員選挙のあと、研究所の将来を相談するためにコアメンバーが集まった時、ヴァイルもその中にいた。その会合で研究所を国外に移すため社会研究協会の基金を国外に移すことが決定され、ヴァイルは即刻その措置をとった。パリに移った社会研究所が、正規の所員だけでなくベンヤミンなどの亡命者たちを援助できたのは、ヴァイルの機敏な行動のおかげである。その 5 年後、研究所は亡命時代の最初の集団研究『権威と家族』(Horkheimer Hrsg. 1936) をヴァイルに献じて謝意を表明した。

ヴァイルもドイツを脱出して、1931 年から 1935 年までアルゼンチンに留まった。アルゼンチンでもその資産を自分の大義のために使い、ナチスの支配から脱出したユダヤ人同胞などの亡命者を助け、自由主義的な論調で有名なドイツ語紙 *Argentinisches Tageblatt* を援助し、ペスタロッチ式学校を創設・寄付した。また同地の大学で経済学教授となり、所得税の改革に顧問として参画した。アルゼンチンはヴァイルが参加して改革された税制によって財政危機から救われたが、その改革は富裕者の徴税逃れを防止するもので、彼の事業上の

パウル・レヴィが不完全なテキストにもとづいて公表したローザ・ルクセンブルクの『ロシア革命論』のオリジナル草稿を入手して、レヴィの版にはなかったテキストを紹介している (Weil 1928)。その公表に何らかの政治的意図があったとは思われないが、レーニンについてほとんど語ることのないヴァイルがルクセンブルクのテキストの再生にその精力の一部を傾けたことは念頭にとめる価値があることであろう。

仲間である階層の利益に反するものであった。また彼自身の事業とその収益の分配をめぐる同族や共同出資者との争いも熾烈であった。枢軸国よりの立場で高まっていく権威主義と反ユダヤ主義と、資産をめぐる争いのなかでついには生命の危険も感じるようになったヴァイルは、ニューヨークに移住し、10年後に米国に帰化した。ニューヨークにはパリから逃れてきた社会研究所の旧友たちがいた。ヴァイルは社会研究所のために10万ドルを寄贈して、再び研究所の所員となった。

1930年以降の研究所の雑誌へのヴァイルの寄稿としては、「ニュー・ディール等の経済への国家介入」(Weil 1936)、「ドイツの戦時経済」(Weil 1938)などのレビュー論文があるだけだが、研究所が1943年に米国の労働者階級における反ユダヤ主義の研究に取り組んだときにはヴァイルもそれに加わった。²⁰⁾しかしこれは膨大になり過ぎて出版されなかった。米国ではヴァイルはむしろ、ラテンアメリカ経済の専門家として知られ、1944年に出版された『アルゼンチンの謎 *Argentine Riddle*』(Weil 1944)はヴァイルの唯一成功した著書になった。その序文は1944年6月にコロンビア大学内の社会研究所で記されているが、表紙ではヴァイルが共同設立者であったラテンアメリカ経済研究所の出版物であることが示されている。

ヴァイルのアルゼンチンにかんする前著『アルゼンチンにおける労働運動』(Weil 1923)が、彼の1921年のアルゼンチン滞在の成果であったことは既に述べた。当時のヴァイルにとってアルゼンチンの労働運動の問題点は非政治的なサンディカリズムと無政府主義に向かう傾向、および指導者と人間的に結びついた派閥体質から抜けきれないところにあった。普通選挙が実施され、それまでの寡頭支配にかわって自由主義勢力が政権につくなかで労働運動も高まりを見せ、1921年6月の労使対決ではゼネストを呼びかけながら指導力の欠如によって掛け声倒れに終わって敗れていた。また都市の外部には悪条件に放置された農業労働者が広範に存在しているが、彼らへの組織化は全くなされていなかった。コミンテルン議長のジノヴィエフがアルゼンチンをはじめとして南

20) この反ユダヤ主義研究については、徳永(2002)143ページ以下、古松(2014)第3章を参照。

米で赤色労働組合の運動が前進していると述べたのは、明らかに過大評価であった。

この前著が欧州の革命的な労働運動の視点からアルゼンチンの労働運動を概括したものであったのに対して、20 年後の著作『アルゼンチンの謎』²¹⁾の視角はもはや共産主義者のものではない。農村部における大土地所有者（エスタンチエロ）と外国資本の結合によって植民地的な経済構造になっているアルゼンチンにおいて、ヴァイルが唯一の希望としたのは工業化にともなう民主化の可能性であった。

「私は現在のアルゼンチンがどのような岐路にあるか、それが新しい工業化と旧来の農業的利害のあいだで戦われるバトル・ロイヤルにさらされていることを示したかった。」

(Weil 1944, p.xi)

都市の市民層を背景にした自由主義勢力（急進党）は 1916 年の男子普通選挙によって一時政権についたが、1930 年のクーデターによって政権から追われていた。所得税の改革においてヴァイルが協力したのは政府内にかろうじて残っていた自由主義者やユダヤ人専門家であったが、権威主義と反ユダヤ主義の高まりのなかで彼らは孤立していた。クーデターによって政権に復帰した保守勢力は、愛国主義の言辞と裏腹に、英連邦がオッタワ協定によってブロック形成に向かうと、穀物及び食肉の市場確保のために英国資本への従属を臆面もなく受け入れた。第二次大戦勃発によって食品輸出の市場が収縮すると、所得保証と公共事業によって国内市場の拡大をはかるアルゼンチン版のニュー

21) この書は以下の 7 章と補論・付録からなっていて、アルゼンチンの政治経済的構造をジャーナリスティックともとれる生彩ある筆致で描いた良書である。

1. 政治、2. 労働、3. ESTANCIERO（大土地所有者）の国、4. 工業化、5. 「ニュー・ディール」の試み、6. アルゼンチンの工業の将来、7. 米国にとっての大きなチャンス

補論 統計の無思慮な使用について、付録 A ラティフンディオについての事実と数字、付録 B アルゼンチンにおける国外産業コンツェルンの製造業および商業の支店・支社、付録 C 産業についての事実と数字、表 I-XV。

ディール（ピネド・プラン）が提案されたが、保守勢力と自由主義勢力のどちらの支持も得られずに直ぐに捨て去られた。政治家の失策が重なると、大農場主を核とした支配層は民主主義を廃棄する強権政府を待望し、軍人たちを政権につかせる。そのようにして 1943 年の再度のクーデターが起こり、今度は全体主義的な独裁政権が生まれる。抑圧的な軍事政権の成立は、進展する工業化と支配層の既得利害との対立の産物なのである。

「もし民主的な条件のもとで工業化が自由に進行するなら、政治的関心をもち、市民権を意識し、民主的なコントロールを行使できる市民層が生まれるであろう。こうした発展を厳しい統制のもとに置こうという警告が与えられた。1943 年 6 月には、そのような統制が適用されたのである。国民が〔工業化という・・・筆者〕大きな構造変化を経験しつつあるなかで、そのような統制が国民を服属させ続けることに成功するかどうか、それとも工業化によって解放される力が、ついに、遅まきながらも民主的な生活の到来への道を開くことがないのかどうかは、これからわかることである。」（Weil 1944, p.72）

ヴァイルはこの 1944 年の著作で、アルゼンチンの工業化のためには、米国との関係の改善が鍵になると論じている。英国と違って国内に有力な農産物ロビーをもつ米国はアルゼンチンとの貿易摩擦を繰り返してきたが、アルゼンチンの資源を開発して工業化を助ける豊富な資本を有している。米国がアルゼンチンに対する善隣政策を信頼できるものにすれば、アルゼンチンも米国からの長期投資を受け入れて工業化を加速できるであろう。

ヴァイルは 1943 年の二回目の軍部クーデターも強力な政府を求める支配層の要請に応えたもので、民衆の支持を背景にしたものではないと断定した。ヴァイルはこのクーデターで権力を握った軍人たちのグループのなかの実力者が、GOU（枢軸国より将校団）を動かしたペロン大佐であることも見落としてはいない。軍事政権下に労働大臣に任命されたペロンは「社会平和」を実現

するために社会政策にのりだした。この社会政策は、ユダヤ人共産主義者²²⁾の影響を排除して全体主義に労働者を導こうとしたものであった。ヴァイルはこうした強権体制の成立自体が、不可避免的に進行する工業化のもとでの労働運動の発展と社会の民主化に暴力的に抵抗したものだと解釈している。それは妥当な見解ではあるが、ペロンが労働者階級と結びついてその後 10 年以上にわたってアルゼンチンを支配し、さらに現在のアルゼンチンの左派勢力にまでつながら強力な政治潮流（ペロン主義）を形成するに至る可能性には考え及んでいないようである。アルゼンチンにおいて、国内の市場拡大・工業化保護の政策は民主主義ではなく権威主義的なポピュリズムを生み出したのである。

5. 後半生

第二次大戦後のヴァイルの後半生には、前半生のような輝きはない。前半生における彼の活動を支えた資産は失われていた。アルゼンチン時代に彼は事業から脱退し、それをめぐって共同事業者や親戚と仲たがいがいした。第二次大戦後にアルゼンチンで起きたインフレーションは彼の資産をごく僅かなものにしてしまった。

1951 年研究所がフランクフルトで再開されるとき、ヴァイルはナチスによって否認され、研究所の敷地などの資産が没収されていた「社会研究協会」の資産返還の手続きを取り、返還された資産を発祥の地に戻った社会研究所に寄贈した。それによって、社会研究所のパトロン組織であった「社会研究協会」は消滅した。社会研究所の再建資金は、ナチス支配期に国外で維持した学術研究の名声によって、ヘッセン州やドイツ連邦共和国等の公的資金から得られた。研究所再開の式典に彼はポロックとともに参加したが、ポロックと違ってフランクフルトに留るようにという誘いを断った。

米国に戻ってからも、ラテンアメリカ関係の研究機関や雑誌との関係は継続していたようだが、住所はニューヨークからカリフォルニアに移した。そこで

22) 「ユダヤ人」「共産主義者」は軍部が労働者大衆の共感を得るためのスケープゴートであった。両者があてはまる（党籍の点からは後者はあてはまらないにせよ）ヴァイルがアルゼンチンに留まらなかったのは当然であろう。

は、民主黨員として地域政策に関与し、専門知識を活かして不動産や税制問題にかかわる組織のスポークスマンを勤めたり、政策パンフレットなどを出したりした²³⁾ こともあるようである。

第二次大戦後のヴァイルの唯一のアカデミックな活動は、研究所の所員であったポール・マッシング (Paul Massing; 1902-1979) の反ユダヤ主義の起源についての著作をドイツ語に訳して公刊したことである。それはナチのジェノサイドにまで至った反ユダヤ主義の起源を帝政ドイツ時代の政治潮流および社会心理のなかを探ったもので、おそらく父ヘルマンの研究所設立の意思にもっとも沿ったものであろう。フェーリクスは父に背いてコスモポリタンな革命を夢見たが、ドイツでもアルゼンチンでも、(革命ロシアでもアメリカ労働階級の中でも) 反ユダヤ主義に出合ったのである。²⁴⁾ ホルクハイマーはテオドル・W・アドルノと連名でこの訳書に寄せた序言で、訳者についてはほとんど触れることのない西洋の習慣に反して、それが社会研究所の古くからの友人の手になることを記して特別な謝意を表明した。

「とりわけ特別の感謝が、研究所がその存在自身を負っている研究所の忠実な友人、フェーリクス・J・ヴァイル博士に寄せられる。彼はマッシングのテクストの翻訳にあたってだけでなく、その出版の準備にも倦むことなく当たられた。」(Massing 1959, S. VIII.)

1963 年、65 才を迎えたヴァイルにフランクフルト市から名誉市民のブランクカードが贈られた。彼はこのあとラムシュタイン (Ramstein/Pfalz) にある在欧米空軍基地の学校で退役予定将校のために不動産の取引や経営について教える職につき、ドイツに滞在するようになる。彼はフランクフルトの研究所を

23) 彼の名前が著者になっているこの領域でのパンフレットが数点存在するが未見。

24) しかし「反ユダヤ主義」への懸念は父ヘルマンさえ抱いていたものであり、1920 年代の急進主義思想が最後にたどりつくべき問題であるとは考えられない。ヴァイルの年来のテーマであった社会化論について言えば、彼が指向していた全面的社会化論・非市場的計画経済論の総括が必要なはずである。より一般化して言えば、1920 年代急進主義の思想が、共産主義運動や革命ロシアの全体主義への転化をなぜ防止し得なかったのか、という総括が必要であると思われる。

しばしば訪れ、多元的なマルクス主義の研究への希望を語ったという。また非議会的抗議活動（APO）の学生運動が燃え盛っていた 1969 年 2 月にフランクフルトを訪れたヴァイルは学生たちの行動を賞賛した。これは学生たちの行動に左翼ファシズムへの端緒を見ていた研究所幹部らの見方とは異なっていた。自らがその一員であった 1920 年代の急進的青年たちと彼らを重ね合わせてみているのかもしれない。

1973 年以降は米国に帰り、自伝の執筆に携わっていたが、1975 年 9 月 18 日にデラウェア州ドーバー（Dover, Delaware）の自宅でなくなった。自伝遺稿で最大の敬愛をこめて語られているのは、研究所の同僚でも思想上の同志でもなく、父ヘルマンであった。遺稿には、1951 年に結婚し、彼の後半生の四半世紀を共にした妻アンヌ（Anne D. Weil）への労りの言葉が添えられている。彼女も同年、夫を追うようにしてなくなっている。

参考文献

- Buckmiller, Michael (1988) “Die » Marxistische Arbeitswoche « 1923 und die Gründung des » Instituts für Sozialforschung « .” In Willem van Reijen / G. Schmid Noerr, *Grand Hotel Abgrund: Eine Photographie der Frankfurter Schule*. Junius Verlag: Hamburg.
- Dubiel, Helmut u. Söllner, Alfons (1981) “Die Nationalsozialismusforschung des Instituts für Sozialforschung - ihre wissenschaftsgeschichtliche Stellung und ihre gegenwärtige Bedeutung.” In Dubiel, Helmut u. Söllner, Alfons (Hrsg.) *Wirtschaft, Recht und Staat im Nationalsozialismus: Analysen des Instituts für Sozialforschung 1939-1942*. Europäische Verlagsanstalt: Frankfurt am Main.
- Eisenbach, Helmuth Robert (1987) “Millionär, Agitator und Doktorand: Die Tübinger Studienzeit des Felix Weil (1919).” In Volker Schäfer (Hrsg.) *Bausteine zur Tübinger Universitätsgeschichte*, Folge 3, SS.179-216. Universitätsarchiv Tübingen.
- Gay, Peter (1968) *Weimar Cultur*, Harper & Row: New York (亀島庸一訳 ピーター・ゲイ『ワイマール文化』みすず書房、1970 年)。

- Hecker, Rolf (Hrsg.) (2000) *Erfolgreiche Kooperation: Das Frankfurter Institut für Sozialforschung und das Moskauer Marx-Engels Institut (1924-1928). Beiträge zur Marx-Engels-Forschung, Neue Folge, Sonderband 2.* Argument: Hamburg.
- Horkheimer, Max (1931) “Die gegenwärtige Lage der Sozialphilosophie und die Aufgabe eines Instituts für Sozialforschung.” *Frankfurter Universitätsreden*, Heft 37.
- (Hrsg.) (1936) *Studien über Autorität und Familie: Forschungsberichte aus dem Institut für Sozialforschung.* F. Alcan: Paris.
- Laqueur, Walter (1974), *Weimar: A Cultural History 1918-1933.* Weidenfeld and Nicolson: London. (脇圭平・八田恭昌・初宿正典訳 ワルター・ラカー『ワイマール文化を生きた人たち』ミネルヴァ書房、1980年)
- Jay, Martin (1973). *The Dialectical Imagination: A History of the Frankfurt School and the Institute of Social Research, 1923-1950.* Little, Brown and Company: Boston (荒川幾男訳 マーチン・ジェイ『弁証法的想像力—フランクフルト学派と社会研究所の歴史 1923-1950』みすず書房、1975年)
- (1996), *The Dialectical Imagination: A History of the Frankfurt School and the Institute of Social Research, 1923-1950* (new edition). University of California Press: Berkley/Los Angeles/London.
- 古松丈周 (2014) 『フランクフルト学派と反ユダヤ主義』ナカニシヤ出版。
- Korsch, Karl (1969) *Schriften zur Sozialisierung.* Europäische Verlagsanstalt: Frankfurt a. M. (木村靖二・山本秀行訳 カール・コルシュ『労働者評議会の思想的展開—レーテ運動と過渡期社会』批評社、1979年)
- Luxemburg, Rosa (1974) “Zur Russische Revolution.” *Gesammelte Werke*, Bd. 4. Dietz: Berlin. (伊藤成彦・丸山敬一訳 ローザ・ルクセンブルク『ロシア革命論』論創社、1985年第一部)
- Massing, Paul (1949) *Rehersal for Destruction: A Study of Political Antisemitism in Imperial Germany.* Harper: New York.
- (1959) *Vorgeschichte des politischen Anti-Semitismus* - Aus dem Amerikanischen übersetzt und für die deutsche Ausgabe bearbeitet von Felix J. Weil. (Frankfurter Beiträge zur Soziologie, Bd. 8). Europäische Verlagsanstalt: Frankfurt a.M.
- Migdal, Ulrike (1980) *Die Frühgeschichte des Frankfurter Instituts für Sozialforschung.* Campus Verlag: Frankfurt/New York.
- Mises, Ludwig (1921) “Die Wirtschaftsrechnung im sozialistischen Gemeinwesen.” *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* 47(1).

- (1922) *Die Gemeinwirtschaft: Überlegung über den Sozialismus*. Gustav Fisher: Jena.
- Neurath, Otto (1922) “Ein System der Sozialisierung.” *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* 48(1).
- Polányi, Karl (1923) “Sozialistische Rechnungslegung.” *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* 49(2).
- (1924) “Die funktionelle Theorie der Gesellschaft und das Problem der sozialistischer Rechnungslegung.” *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, 52(1). (「機能的社會理論と社會主義の計算問題」玉野井芳郎・平野健一郎編訳 カール・ポラニイ『經濟の文明史』日本經濟新聞社、1975 年所収)
- Pollock, Friedrich (1929) *Die planwirtschaftliche Versuche der Sowjetunion 1917-1927*. Hirschfeld: Leipzig. (森谷克己訳 フリードリッヒ・ポロック『ソヴィエト連邦計画經濟史論』同人社、1932 年)
- (1981) “Staatskapitalismus,” in Dubiel, H. u. Söllner, A. (Hrsg.) *Wirtschaft, Recht und Staat im Nationalsozialismus: Analysen des Instituts für Sozialforschung 1939-1942*. Europäische Verlagsanstalt: Frankfurt am Main.
- 徳永 恂 (2002) 『フランクフルト学派の展開』新曜社。
- Wainstein, A. L (1931) “Friedrich Pollock, Die planwirtschaftliche Versuche der Sowjetunion.” *Weltwirtschaftliches Archiv* 34(2).
- Weil, Felix J. (1921) *Sozialisierung: Versuch einer begrifflichen Grundlegung nebst einer Kritik der Sozialisierungspläne*, (Praktischer Sozialismus, Nr. 7) Gesellschaft und Erziehung: Berlin-Fichtenau.
- (1923) *Die Arbeiterbewegung in Argentinien: Ein Beitrag zu ihrer Geschichte*, Leipzig: C. L. Hirschfeld. (再録 *Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung*, Bd.11, 1925)
- (1924) “Gildensozialistische Rechnungslegung: Kritisches Bemerkungen zu Karl Polányi ‘Sozialistische Rechnungslegung’ in diesem Archiv 49/2 S.377ff.” *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, 52(1). SS.196-217.
- (1928) “Rosa Luxemburg über die russische Revolution. einige unveröffentlichte Manuskripte. Mitgeteilt und eingeleitet von Felix Weil.” *Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung*, Bd.13, SS.285-298.
- (1936) “Neuere Literatur zum >New Deal.<” *Zeitschrift für Sozialforschung*, H.1.

- (1938) “Neuere Literatur zur deutschen Wehrwirtschaft.” *Zeitschrift für Sozialforschung* H1/2.
- (1944) *Argentine Riddle*, Issued in Cooperation with the Latin American Economic Institute, John Day: New York.
- (1975) *Erinnerungen*. Manuscript conserved at the Institut für Stadtgeschichte Frankfurt am Main (Chronik S5/421).
- Wiggershaus, Rolf (1988), *Die Frankfurter Schule: Geschichte, Theoretische Entwicklung, Politische Bedeutung*. Deutscher Taschenbuch Verlag: München
- (1995) *The Frankfurt School*. Translated by Michael Robertson. Polity Press: Cambridge UK.
- 八木紀一郎 (1976) 「社会研究 (Sozialforschung) とマルクス主義」『名古屋人文科学研究会年報』第2号。
- Yagi, Kiichiro (2011) “Was Sozialforschung an Aesopean term? Marxism as a link between Japan and the West.” In Kurz, H. D., Nishizawa, T. and Tribe, K. eds., *The Dissemination of Economic Ideas*. Edward Elgar: Cheltenham, Gloucester.